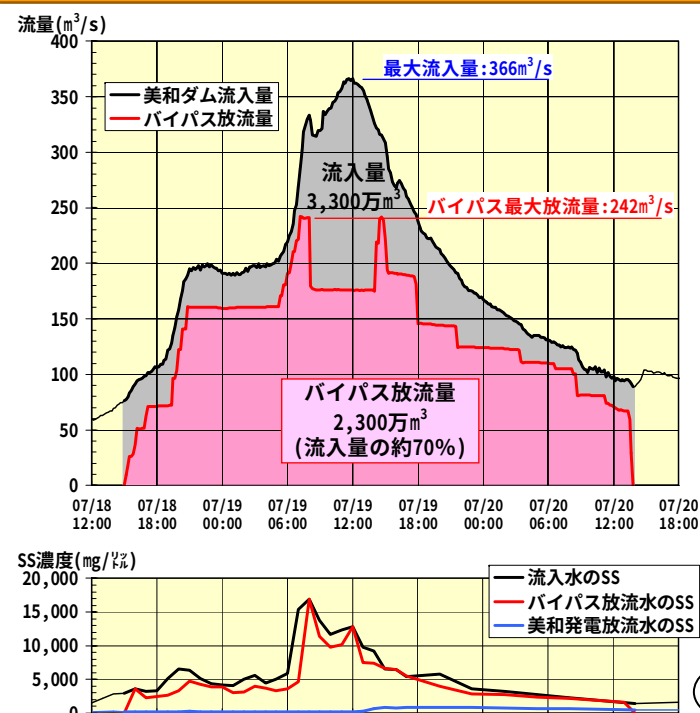


美和ダム 三峰川バイパスの試験運用速報（その3）

美和ダムでは、7/17～7/19にかけ流域平均で約250mmの降雨を記録し、最大流入量が約370m³/sの洪水となりました。三峰川バイパスでは7/18 15:00～7/20 14:00の約47時間、最大で約240m³/sの放流を行ないました。
注）ここに表示されているデータは速報値です。

上流域からの濁水のうち約70%を下流へバイパス



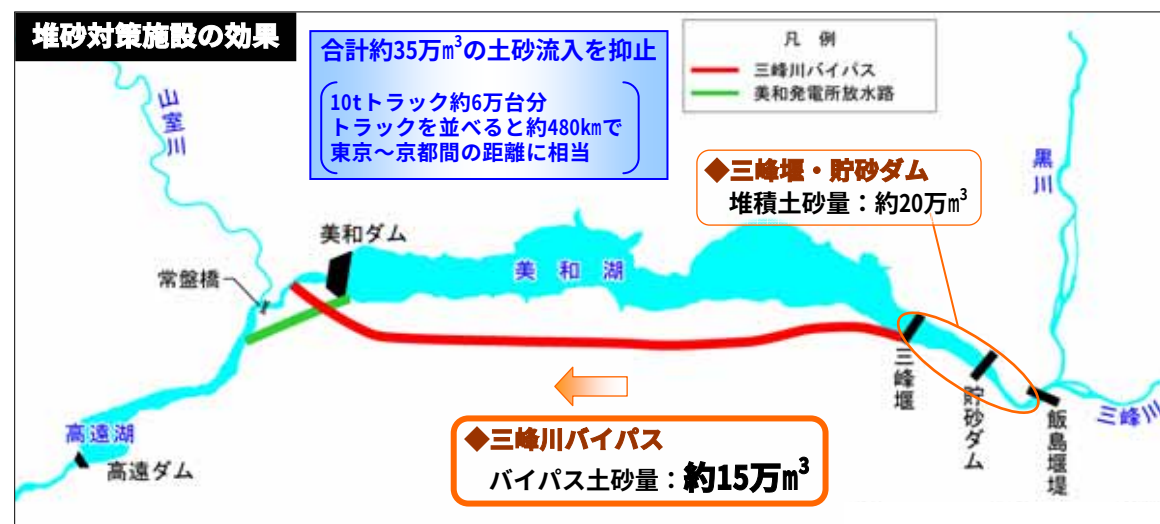
今回の洪水では、流入量が概ね100m³/s以上の期間で三峰川バイパスの試験運用を行ないました。三峰川バイパスからの放流量・濁度（SS）の時間変化は、左の図のとおりです。
三峰川バイパス放流期間中、ダムへの流入量3,300万m³のうち、三峰川バイパスにより2,200万m³を放流し、上流域からの濁水の約70%を下流へバイパスしました。この放流水は上流域からの流入水とほぼ同じ濃度でした。

例えばSS17,000mg/lは、コーヒーカップ一杯に、砂糖を小さじスプーンで1/4杯程度の濃度です。



バイパスにより約15万m³の土砂流入を抑制

今回の試験運用では約15万m³の土砂量を下流へバイパスしました。さらに、貯砂ダム・三峰堰で砂利や砂など約20万m³を捕捉しました。これらの土砂は施設完成以前は美和湖へ流入していたもので、以前に比べ合計で約35万m³の土砂流入を防いだことになります。



注）各地点で測定したSSデータと流量データから、通過した土砂量を算定しました。

<語句説明>

- ※SS（浮遊物質）…SSとは、水中に浮遊する粒径2mm以下の不溶性の粒子状物質の濃度のこと、水の濁りの度合いを表す指標として用いられています。
- ※クロロフィルa量……藻類などに必ず含まれる緑色の色素の1つで、藻に付いた付着藻類の量を示す指標として用いられています。

2006/09/05
国土交通省中部地方整備局
三峰川総合開発工事事務所

付着藻類は施設完成以前の洪水と同様の傾向を確認

三峰川バイパスの運用時に下流の河川では濁りが一時大きくなります。それが下流の環境に影響を及ぼしていないかを調べるため、洪水後に回復していく過程や、個体数の長期的な変動状況を調査しています。
今回の洪水でも、施設完成以前の洪水と同様に付着藻類の量はほぼ皆無となりました。その約3週間後の状況では付着藻類は洪水前と同じ程度の量に回復し施設完成以前の洪水と同様の傾向が確認されています。

○礫表面の付着藻類の状況
(伊那市高遠浄化センター付近、7.6km付近)



○河原の状況
(同上)



恒久堆砂対策施設に異常はありませんでした

試験運用後に、三峰堰・トンネル内部・吐口部及び三峰堰に変位、変形は認められませんでした。
三峰川バイパス内に、破損や磨耗の痕跡は認められませんでした。また、ゲートについても摩耗は確認されませんでした。



三峰川バイパス内部の状況
(7月20日) (放流終了直後)



三峰川バイパス出口の状況
(8月17日) (放流後約1ヶ月)



バイパス主ゲートの状況
(8月20日) (放流後約1ヶ月)